

門へ18 種
號 1833
巻 75



繪本左圖記七篇卷之三

目錄

又右邊門忍入内裏話

右田山紅葉將の國

中納言殿衣冠を刺し給ふ國

津風荒邪と戀凡國

又石居田生捕石川話

左圖自らさす押清と衆路入國

又石居田石川を生捕る國

繪本左圖記七篇卷之三

三條河原京又右衛門詰

龜田城の中より藤原景衡六と捕る國

田中兵衛石川が越後越前と捕る國

三條河原刑場の國

秀次公謀叛露刃話

秀次公討てしるる男女を討殺し入國

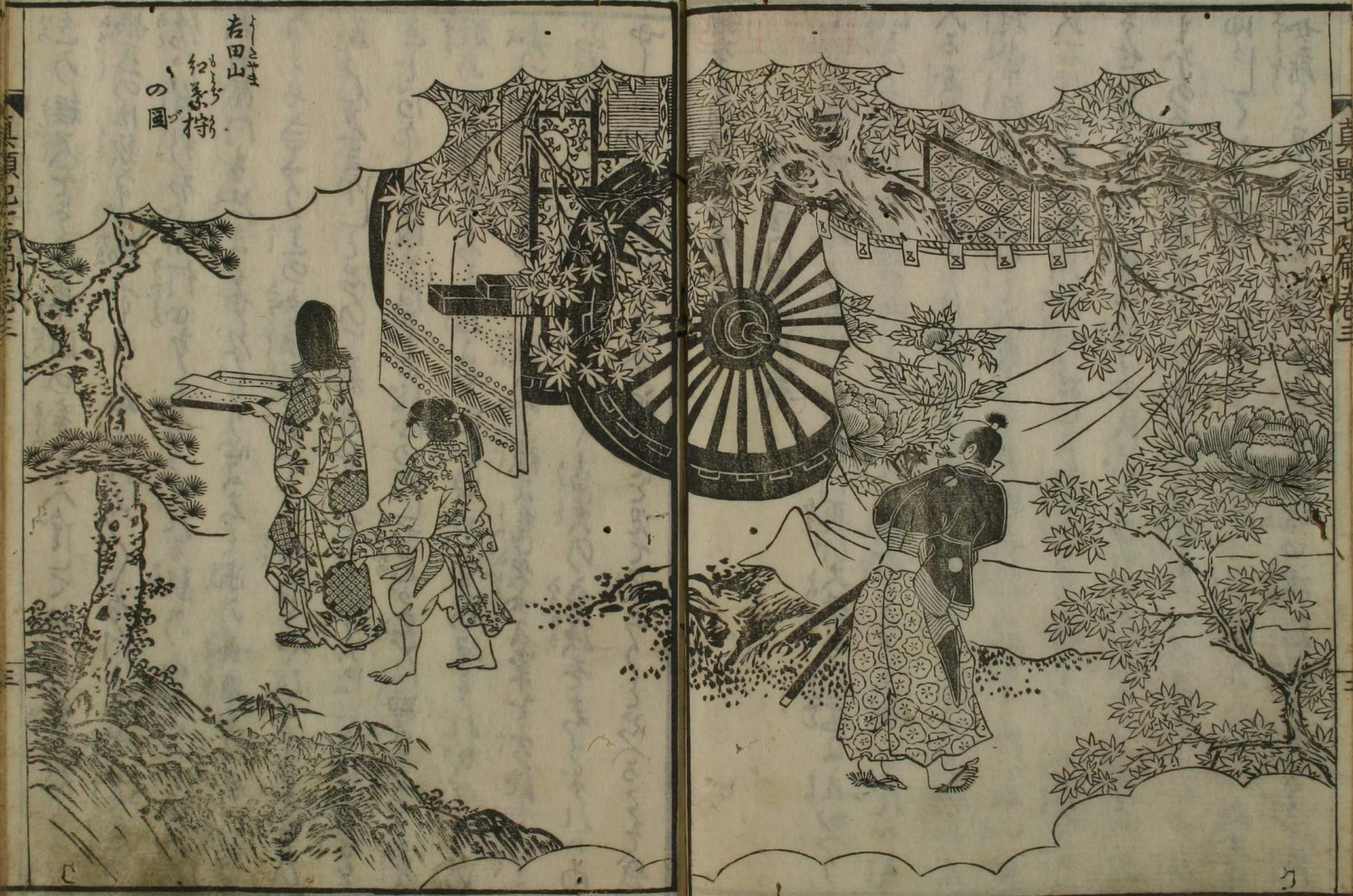
三條河原中兵衛が捕と騙る國

繪本古圖記七篇卷之三

又右衛門殿入内裏

文祿二年秋乃以より石川又右衛門再び大佛の門を立入り
け度と乳杉殺蕩のつるまひを止め只何となく善しとん立
入る友どらとそとははあつたり殿下乃河内より不破傳作本
村常陸公とむらへ入来りて武衛兵法の討をうけぬ一日
又右衛門右田の瓜拵外せしよ紅葉せし樹の下に女車と立
させしよそれ乃幕の同より又ツかきこの小内若さるひの袴
と巾のがき見ゆふぞ袴家うつり大長家の姫若あんと奥
ゆりしくたちやとひささめ居りしよ上菊子はけりぬ末の
女房と見えて白媛の肌衣と茶碗の袴裾短と付とるが居



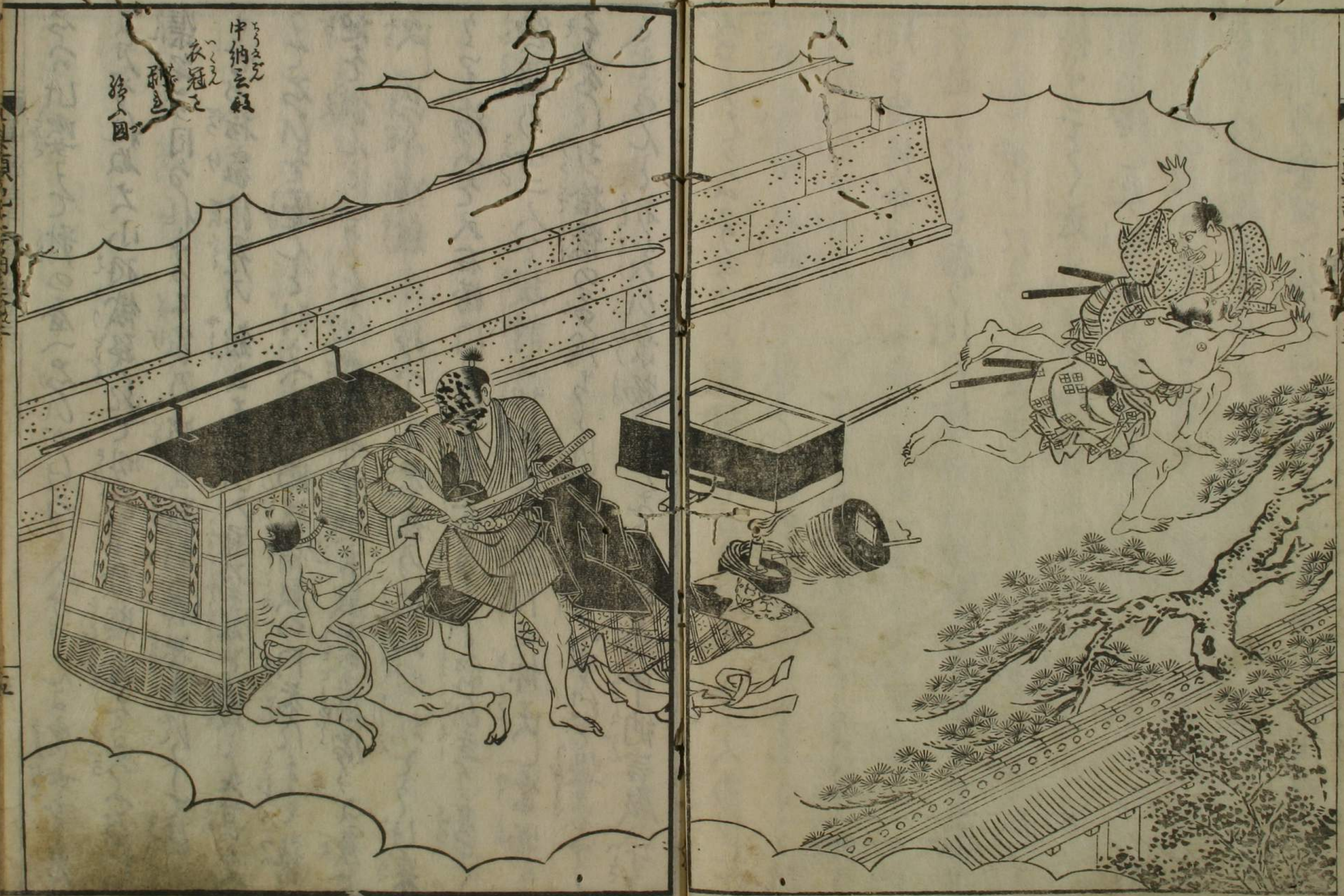


吉田山
紅葉狩
の國

真景言七及扁卷三

是乃短尺をさしげ車副の毒一大食して社母が家へ移りたるか
姫君の法教をど賜ふも乃ちやといふくも門じくを女房の
後には村紗やふ何心方く見入りたる親乃あてやうる教み
又右衛門も只まなゆれどうり心よ志を末の女房をうかひ
なまめきうりこの女房形違ふといひ嘆るまやびうるまを
あうん見ましとあひて幕のやうとそれといはしよゆこま
とどわううさあうは見をば心のにして己が家にゆりたるを
短乃白いみよ志を懐よやとしきみまのまをしむくその
あつうく心よ志を我の金銀も竟女と末と女房を
志ひ居りしが下候よ生もくも夫のあ換を志うるがあ
中乃下素女飾しき金銀の志を志うるとあうるを我

あうるをうりたると慙愧して向うへは毒三人ありしと
一尉は退出ぬねもその後には外の多に目もとまうり
肉裡女郎と妻よはしてんとさまぐ工まうりたるが大内よ
後ら典侍命婦の女房の交なり天子の霧と蒙る皇后
皇妃とくも獨り住り寡婦と押しじく男子うる者の
往來と禁じたましく天子の許幸し終ふを早懸よ雨を
得うるごとく滋は一日の晴は百年の雨を志うるとあうり我
あひ得し思御深身の法を志て大内乃對の志よ志のび入
彼玉輪の津乃さめりまうりい候るく通い戯んとい
むりこれ親樂るうんとく其後三交の法を膽もこの
所乃築地と伺ひ志のびいんとたけいしが又うらま



中納言殿
衣冠之
跡
跡人因

真蹟言七卷三

四

ちのけ次女とて對の座へおひげをく入さるんは宮女どもも
 見んるれぬ大小御鐵器にて叫びるは頗真を失ふるし
 樂等の目もれらるる家の次女は糖ひるは悲まはくして涙
 しせも持家法苑乃皴ま志のび入冠物衣束と盜まえ其入
 しておひを遊んと引入して法法輪殿の門前へ来て樂
 地を蹴んとしるる衣に世尊寺中納言殿内の御拍落りよ夜と
 更し只今御淨皴し給ふとく衣後の他人灯燭とうげ案
 くりと給ふを又右邊門見て寤美のゆふといほびまきり考
 興賜りま人と按討よ切放せば皆一日は仰天し粟物日
 を衣に打捨膝の子狐らうはくくは方へむ門と遊矢する
 ともめんし打笑ひ粟物乃戸を引的まば中納言殿の
 ちの心地はしまさばうの門前よりて法后給ふ又右邊門や
 を穿て渡しそヤケのいと又悲まはくき給ひそ我害心あり
 ちのいひははらうは唯其冠物衣束を刺えのこりうと
 ま小首筋きて引切し更と袍襦さ下ばいひはつとされの
 じぬき綾乃下腹白練の肌衣袋冠りらるともよつとくと
 刺え採方中納言殿と粟物の内へ再びをへ入暫くけ衣に
 冷氣くらうは泣き給て家中の者が追ひまきりやさんらひ
 捨てそ衣衣まきり唐門のりはく被ぬ衣束と着し冠と頂
 きも衣袋と揃り我らまきりまびる糖ひるまきり笑つ
 隠身の法をつらひ日花門まきり悲び入へは禁中の三種
 の祓室と妻殿しはまかに天照を祓よりとじらえぬ



神威
荒邪七
櫻木

真蹟記

真蹟記

夏夜ふりし心の燈は燈入るに其れは尚附園白雲次云園
家の政事と抄し終ひ左園の御遠路にきて終ひ在道に
比後君の後は若君誕せまし〜〜〜より由又子の同跡
あ〜あ〜せ終ひ終人石田増田が輩後殿の好心をさそて
秀次云と笑りんと第々々既云幸急なり安よ抄して某様
叛ととも終せり〜〜〜秀次云よ又子の儀と事し終ひ
曾て某が言ふ終ひ終り終人知れど左園を討せり石
田が輩と云んは知れ〜〜〜心を定む人よ告げ終ひ得
熱い〜〜〜大坂伏見の両城は終ひ入左園を掃ひひきた
に海の橋梁いそ心易く討せり〜〜〜十争の園と百重の
園も終ひが終ひ終ひの終ひ〜〜〜終ひ終ひと終ひて立

改よりつ〜〜〜足下の藤樹を考るは終ひ終ひ終ひ
我は勝るの百倍なり左園を討せり秀次云と天下の武將
と定めま〜〜〜足下の事〜〜〜抄して何ゆ〜〜〜叶いど
らん我元素實殿の魂を滅〜〜〜終ひ終ひを口外せり
二言〜〜〜終ひ終ひ終ひ終ひ〜〜〜終ひ終ひと
面を〜〜〜終ひ終ひ終ひ終ひ〜〜〜終ひ終ひと
何よりし心易〜〜〜左園〜〜〜終ひ終ひと終ひ〜〜〜
人間〜〜〜我終ひ終ひを〜〜〜終ひ終ひと終ひ〜〜〜
宮方〜〜〜物乃用は〜〜〜終ひ終ひと終ひ〜〜〜
よ心ゆ〜〜〜待終人〜〜〜終ひ終ひと終ひ〜〜〜
も終ひ〜〜〜終ひ終ひ終ひ終ひ〜〜〜終ひ終ひと終ひ〜〜〜

古園自高諸孫
と社

貞貞巴二女用卷三



貞貞巴二女用卷三

九

けはま朝鮮國と和睦乃あつひはし調ひを圖み
 り名護屋の河津を摩惠多宰相と任せ並に伏見
 の城とゆり移入る右邊門に候りよしと心よりさび膏
 の間より伏見に城中と思ひ入奥殿の廊下の妻に身
 をかけし左衛門の形勢と伺ひ多ふ寛活方々の例なる
 うそおろし登城の大小名は例乃進士小姓等とともみ
 酒宴を催し移ひさづううる我情の強と弱ひたまを
 此脇の茶田徳谷院清いふまろ秋真のつらふともおどろく
 終りく雲乃刻の敷も多たさくわが左衛門奥殿より
 せ移ひ愛もそと又松の丸及其外の女中河津の糸
 志あやう小酒宴し移ひ今宵の酒り番いふ石松を流

為田隼人をとどめ屋敷の勇士十又六人悉く河津を
 下し揚りまの刻さううろ河殿中静まりくを圖り藤殿
 ようせ移ひ又右邊門の膏より乃のりりさまを伺ひんそ
 心の内悲愴よとを伏見より天下の英雄とはけ人の
 かなどと我方のとを引くらんく急角よおひ居ける
 程よとや西邊の法よやあせん時分今をと例乃懸綱を
 移ひよとのい乃武士城と眠をきざし子石為田がと見
 勇士まもぐり強よより澤子よとせし將時若後と并へ
 び又右邊門今心安しと候足して後殿を親へを圖
 りすく藤移ひ野の夢さうくゆゆ仕とほしうりさ刀の柄
 よとさうけ飛うらんとせし右に河津秘苑の子を此番



真景七篇卷三

卓より居りて所抱えよ盡せらばしが不恩後わらうるは
 香爐夢と後しく鳴り教夢としその又右衛門忠ひが
 けるたのめらるれが勇気うらもて行はしよを固むくと死
 立終ひ宿世の者惟うらるとるさうくよとらと驚きふ石
 齋田進兵衛して後殿をそれが大の男一人格多跡取り振
 側よ立出さうとや曲者のがはまじとふ石権兵衛進兵衛
 て後よりむどと組どり續く齋田うけ来り利腕立て
 引倒せばけ物言ふ宿世の勇士我しくと弛糸う打
 ちつてさるも小むいはいはしめ殿後禁断せらるるけふ
 多の香爐と中流の後河の大守今川義元が家た信介
 多を差かりし今川家勲絶其子氏御降降の時信長

乙一軌一集しせし又信長本願寺よ抄あり光秀がうら
 裁せらば終ひ居城安まへ明智虎馬反馳向ひ金銀手巻
 のころは坂本の城へうらじらるが秀吉云ふは光秀と後
 坂本よ兵を進めり攻討終人が右馬今川路戦は終はし
 とく信長云所不持の事を美田福又派く秀吉云へ送りま
 してせ切腹して終りたる樹の香爐はけ中よありて秀吉云
 の所よりさうられ二つたりのよめでさ終ひ名護屋所出
 陣の時も赤尾松又入る下向し終ひしが松政与次を信長
 又悪心と後しを固と矢ひをうんと掃りし時しけ香
 と後して啼たれと凶多を告る香爐はけを固又よ心づき
 終りて唯不恩後の名巻とせしるる小洲船既又覆んとは

是よりしては香爐の凶と云ふ人の方々といふく
香爐く香炉沖牙逸と放ら給いざりしは今宵再靈文と
於し危き殃難と云き給ひく例稀なる宝器なりこそ
云うしなぐら右圖の威徳又依るもの此今川義元相模
向の合戦又其方こそれとも香爐有て凶と告げ信長を叛
臣のふも裁せしと給ふも放て啼るは抑て下の民去炭
と若ゆるの心と云き天より命じて徳倫乃英雄とせし
其國其民を保しむ右圖のどれた天乃命せる英雄はして
たふ多の香爐はく流るも松次と次を清石川又右邊門
どれた狼民乃ふいふと云き牙を流り給ふをた是と天世
無民之系牧之と云ふ

三原河原京又右邊門

云々又又を抄の面々高深ありて中司又命て又右邊門と
引出右圖の殿殿(おび)入教信(おび)なりんと計る案匹
交中郎のるは業打しは叛逆の張本あはしゆらふ白旗
せよと云まぐ携同又及びこれと石川又右邊門とく
よく善く諸候の至後へ押入財宝と奪ひ去の外何者か
教さひりんとく外又中司言系り及しされとも右圖の
しまた望城へおび入曲者日類と教まみ及しとく目こ
系き携同又おび給ふとも少ししひるめるるく思大言と
吐き司変と罵り傍若無人乃お換なりと云るふ河原
龜田城のら中より一人の城後をとりへ孔明せしと云ふ



真
 顯
 言
 七
 篇
 卷
 三

十四

紫帽六とて石川又右衛門が中下乃城なるはし尸以又より
執て伏見へ引渡しつるがけ指上が白痴とて悪徒の目録跡
らにわかれ諸方へ人を馳せとらんとせらるふ一月計は二十
余人を擲り得たりけ者とも悉く拷問及びび多巡見復し
とあつて水は火垣を掃り岩村とて上段を殺し回丸とて
大令と奪いしつるを悉くとせと違し按外の別盗世の
見懲しよとて三系河系又大令と居内又沖と湛へ二十余
人の属手とた又京殿とてしこの洋定よ一皮し又福三年
冬十月洛中洛外を以て後にはつる小見物の老若男女雲
のどく集りてつるはし刑罪も多き中又たれしとせ
ぬ谷守の悪人なむし石使たりと皆つらとて僅しつる

系極通松系又森如形とて茶人たり日素又右衛門に更
りふく茶味と淡く會せはるや度く方りしが思ひざり
き盜賊乃魁首とて倉喜の越刑又所せつらくとと今
度へ引來ると紐束の群集雅とてと累地とて如形
夫婦にらるむぎんとて引つと跡居るふ又右衛門如形が
門前へく繁護乃武士と向ひ暫く馬をととめ給つるを
是方り家の都と名する茶人のよし通くつ及つて終に
人なり祿もも落茶一ツ不守しつとて武士等其乞ふみ
まうせ如形を呼びよとてとせむ心得ひとて執る夜
服をけつたぬ樂の茶碗と煎てはしおせば武士とて
活しむ又右衛門大と病びつら心よや末期乃茶とて

真蹟記七篇卷三



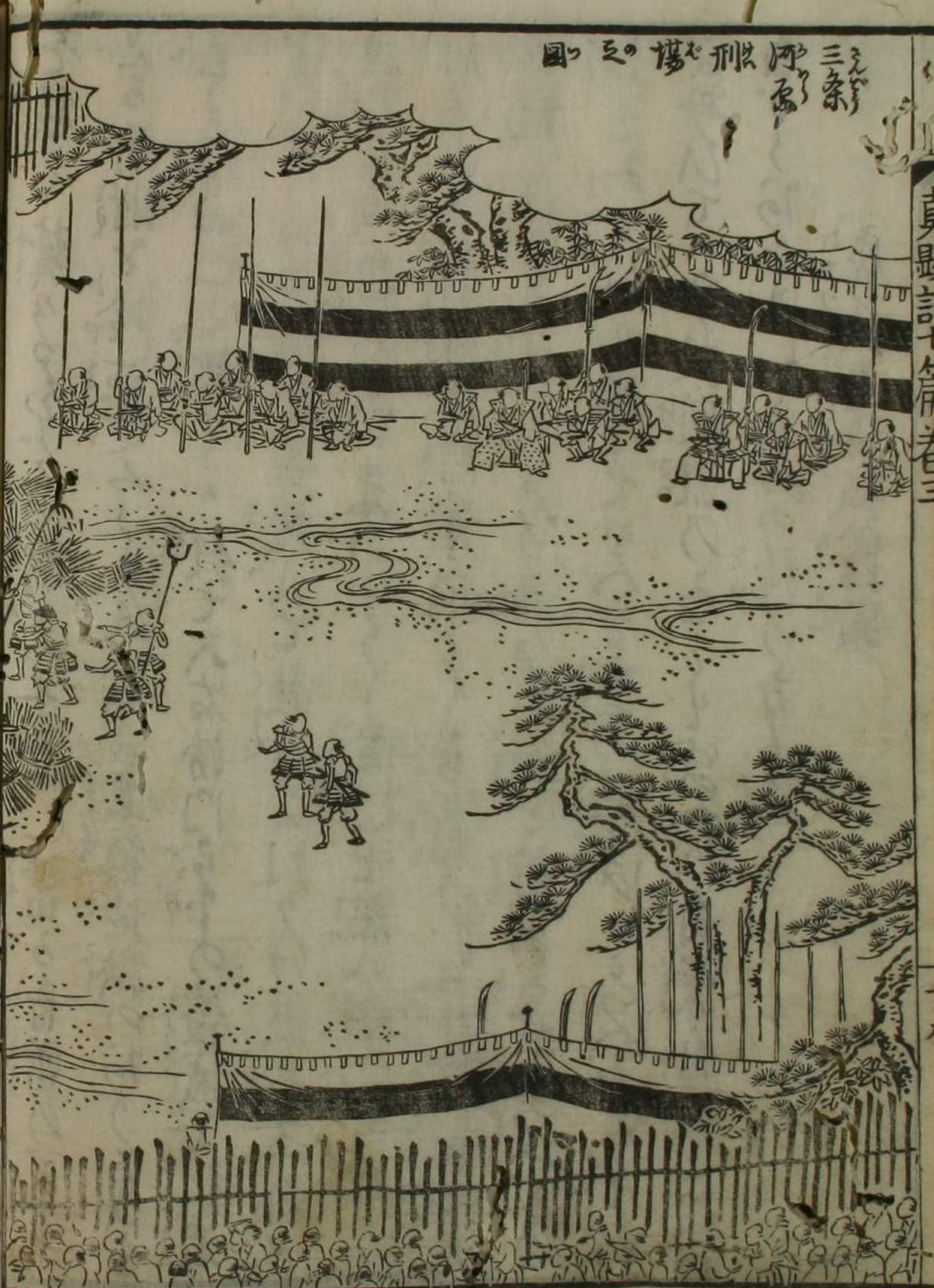
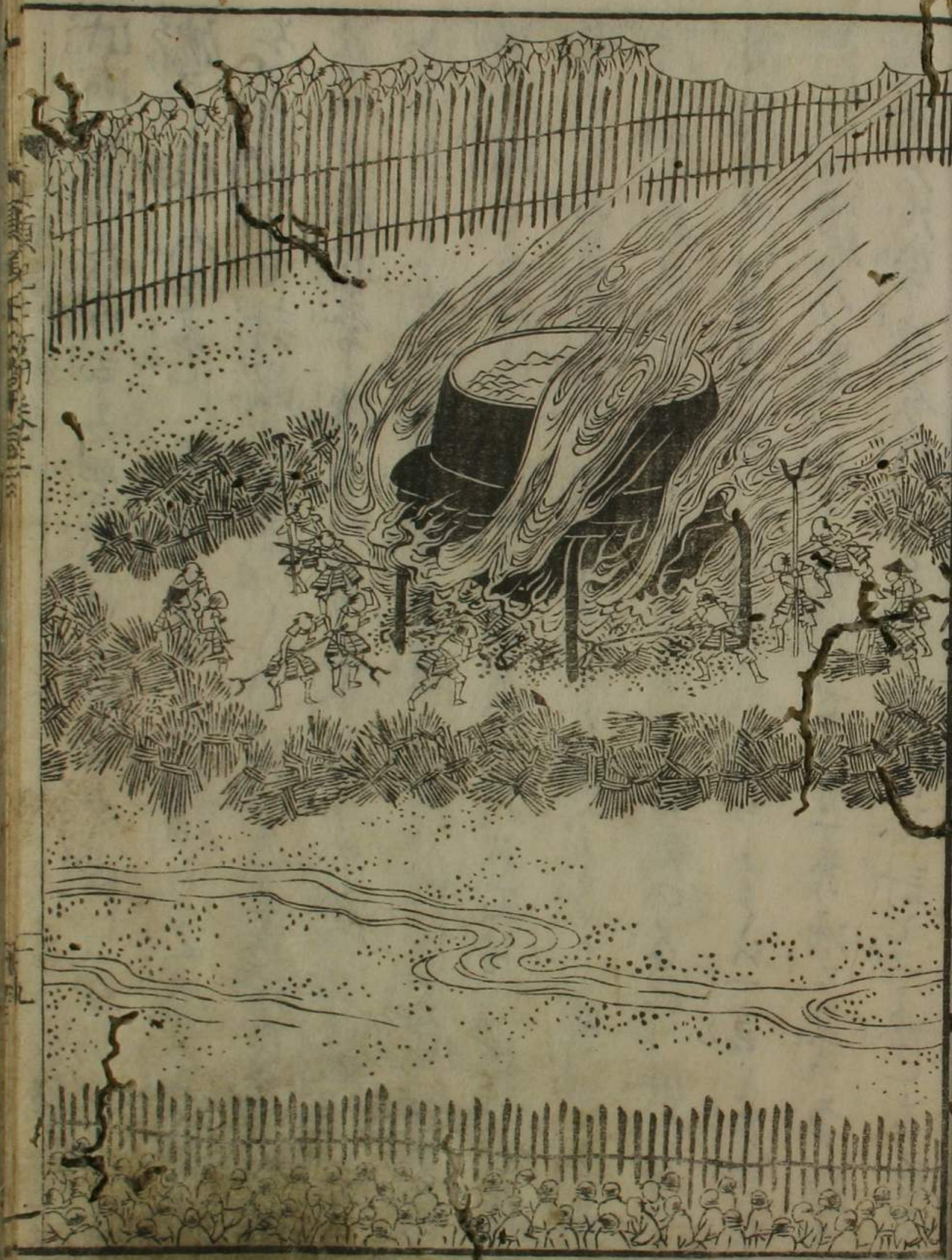
田中兵衛
石川
恩と
頼と
園

莫
題
記
七
篇
卷
三

山の方へ引き移し後罪人を引る時乃例どかりては家
まそ茶と何え音しむとぞ定又又右傍門が属の中
又回中兵隊と入る功の者何りけ度乃捕りたまぬとい
にせし又右傍門と敷い出さんものと見物れ群集にま
ぎれ程縁しが石川が通る時つと飛りり繁固の武士一
人抜ち又切倒し又右傍門を引立去んと見よ何れ
がらんと大勢またひしめく復又今の是まをとおひく
又右傍門は向ひ山に思成被ひしぞと叫りりよそ通がご
とた見物の中又まぎれひしめく方知りぬありにかりけ
者後加後法正又仕一様又百石所得く名名武士と
るより扱も河原には巨金三つと立て仲と盛業新

を積り焚くろろわが不端天を焦し雷のどと
見る者肝と冷し徳とくすまは流又焦地獄の何りさま
是ははとじと悲し、於て又右傍門ら下の盗賊と引来
ていまその縄を其終よて終よ又引りけ彼金の肉一
投へまは忽又驚い茶のどく度七勝八倒して叫び
犯しつらぬ編麻竹葦のどく歩集りし見物の男女老
少教て目と定りく見る者ろく面と敷い気と去りし乃
教を知り地矣固しそ人を見の例多しと人とも奉朝
よ母ひていし刑罪のありとも人自業自得といひ
うがう何とまはしとまの終りかり

秀次公孫孫後露露顯



三條河原の場

貞顯言七條卷三

此の時侯白秀次云を要領いよくをばし移し相見ふ
 腕甲倭人を巻しまのころに櫓の上より及人
 を多銃を討殺しまぐの何き業の暮ら坊
 移人と本村常隆女いなるをねるや又其要領を
 備りなすに一向所係致を進り糸く世に若し固し時
 運の傾く志はかりたりけ度石川又右衛門伏見の櫓
 中より大車と得り獄よりしとまへより秀次云本
 村より及人の大なるなりと内々合戦の及破り時改る
 用意ありしよ又右衛門秀次云の成りてく一言に口外せ
 ざれば盜賊の罪は極り深きせらば秀次云幸よく押
 せらる常隆女殺しとまぐの謀計と工と出しを圖を

秀次云の亭へ遣ふ糸く者者を伏て討せしんとや
 和らふ秀次云いとしと大層の古圖いふせうとる情あり
 するまひとるさんやとく所許容し何うざりしを強く
 中進りなり又福に奉二月なりし徳谷大膳をひて左
 衛門中なるに秋の法は八洲小糸のまより又将々を始
 り所控をばしをるん若若所慰とのたれ常隆の亭へ遣
 せたりん所許を色親ひなりとやとよりたりふを圖糾
 らるに所感ありてともかくも固白の心はまうんをばし
 て大膳のち力所腹なと下し揚りはつて後場ひたれに大
 膳辭して常隆にゆりまうくと言はしとれはさうが判
 せよ候と所待致の所殿と造營せしとよとて

真蹟言七篇卷三

廿九



秀次不戲又街
素
國

真顯前七位
卷三

三

し多度より申き... 後刻津教を... 兼人とし... ち返し披き...

近き比古岡... 申すも山... 者と携ひ... ありし津... 以て返忠... 以て...

我名成強一如形

とかき... 多うけ... して... たり... ひく何... たり... いま... 透... 此... 更...



三城智
田中兵部
國 膳



貞显言七尾篇卷三

貞显言七尾篇卷三

九三

夢て再び發きこりておぼしき事ありしや
 仰のどくは既の御意へし出る事なく外候はるに
 在りべいさうを計のたのめを幸に知らせ給ふたはけ
 心を付所藩致のみさまを伺ひ去辰と進進仕りし
 を三歳まで待たらば御意の先善法場へ向う何事なき
 して居給ふと云はれしと云ふを以て中へ入給して中
 河内へ向う其後後者を以て田中と名乗樂の新御殿
 の善法を以てし一園白の伴と伺ひせらるる先ぞ
 ありしやと云はれし事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 此毎日なる事と云ふ事を石田が方へきのいゝ危あり
 今日南へ向うと知らせらるる三歳を園の御意に
 園白の御藩致と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 日まかく中誠し今日又け候を御進上ししはるる尾
 緒を以てし中と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 急ぎ踏候と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 さあなり 出所伏見の人教を算る事と云ふ事
 大方本國に退き御馬向うの者とも被是云候は
 どの軍の勢のまぶしは候と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 中しき御事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 歎きて振さしと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 兼てをいりんと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

園白の御藩致と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 日まかく中誠し今日又け候を御進上ししはるる尾
 緒を以てし中と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 急ぎ踏候と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 さあなり 出所伏見の人教を算る事と云ふ事
 大方本國に退き御馬向うの者とも被是云候は
 どの軍の勢のまぶしは候と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 中しき御事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 歎きて振さしと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 兼てをいりんと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

智圖^{やが}於^まて^と若^と回^と德^と是^と處^とを^とり^とて^と委^とし^とく^と計^と画^とを^と中^とに^と記^とす^と
聖^と德^と城^と一^と巻^と一^と終^とす



繪本左圖記七篇卷之三終

